巻頭特集

数寄道具としての萬古焼の価値観を高めたい

萬古焼の神髄を引き継ぐ 三代 加賀瑞山

今年3月、日本橋三越本店において「喜寿記念　萬古・鼓窯　三代　加賀瑞山　作陶展」が開かれた。開催にあたって寄せられたメッセージには「現役にこだわり、もうちょっともうちょっとという気持ちで作り続けています」との言葉が見える。今もなお精力的に作陶に励む加賀さんを、いなべ市北勢町の鼓窯に訪ねた。

》三代 加賀瑞山

1944年、桑名市に生まれる。1963年、県立桑名高等学校を卒業後、祖父の初代瑞山に萬古焼の作陶を学ぶ。1984年、三代加賀瑞山を襲名。三重県指定無形文化財萬古焼（赤絵）の技術保持者に認定され、今年で20周年を迎えた。桑名萬古の伝統を守る数少ない陶芸家の一人

桑名高等学校を卒業後 祖父の初代瑞山に学ぶ

萬古焼と言えば、四日市で生産されている紫泥急須や施釉陶器の土鍋を思い浮かべる人が多い。しかし、そもそも萬古焼は桑名の豪商、沼波弄山を祖とする。京焼の陶技を学んで、赤絵や写しを特色とした。弄山の死後、萬古焼は一時途絶えるも、森有節により再興されて、北勢地域に広がっていく。

桑名でも佐藤久米造や松岡鉄次郎たち名工によって「桑名萬古」が生まれたが、四日市の大量生産に押され、次第に衰退する。大正末期、加賀月華・瑞山兄弟らが登場し、古萬古（弄山が携わった時期の萬古焼）の写しなどを作るとともに、新しい作風に挑んだ。

その瑞山（初代）のもとで陶芸を学び、萬古焼の伝統技術を守り受け継いでいるのが、当代の加賀瑞山さん。1987（昭和62）年に桑名市無形文化財の認定を受け、2001（平成13）年には三重県指定無形文化財の認定を受けている。

「祖父（瑞山）が陶工をしている家に生まれ、ぼくが4歳のときに父が亡くなったので、必然的に見よう見まねで手伝っていた。父親がいないハンディを負って東京へ行くことを母親に止められていたので、それならうちの仕事を手伝おうと、この道に入ったのです」

自ら望んで陶芸の道に進んだのではない、と話す加賀さんだが、一度もやめようと思ったことはないそうだ。

「絵を描くのは嫌いでないし、字を書くのも好きやし、筆を持つことも苦にならん。好きというのが一番。陶芸よりも早く茶道を始めていて、ずっと続けて深くやっているけども、お茶の先生になるより陶芸家がいい。やっぱり好きなんやろな」と笑う。

作陶のすべての工程を自分ひとりで手がける

加賀さんの陶房は、北勢町鼓集落を見渡せる高台にある。鈴鹿山系の山々を遠く望め、緑立つ庭の木ではウグイスが鳴いていた。取材に先立ち、座敷で茶菓の接待を受けた。茶道、日本画、書道にも造詣が深い加賀さんの所作にふれ、感動を覚える。

「加賀家は代々金物屋を営んでいましたが、祖父は三男だったので、家を出て伯父の碧山（水谷寅次郎）に弟子入りし大正焼を覚えた。その作陶する様子を見て、月華は弟の仕事のほうがええと、長男ながら四男に店を任せ、やきものを始めるのです」

月華は元々器用な質で、板谷波山に師事し、帝展にも入選を果たした。実業家で初代桑名市長も務めた貝塚栄之助の援助によって、作品を売る必要がなく、芸術家として華やかな道を歩んだ。一方、初代瑞山は職人気質で、地道に作陶と向き合っていた。どちらの道を行くか迷った末、加賀さんは後者の道を選んだが、今痛切に感じることがあると話す。

「生活するためには、値段を付けて売らななならん。今でもそれがいやや。売らずにすめば、そんな幸せはないと思う。プロというのは売ってなんぼの世界。でも売るというのはいややな。せっかく作ったものを手放さなくはならんし、値段は付けなならんし」

陶工としてのあり方だけでなく、作陶についてもふたりは違っていた。月華は職人を雇い、分業制で行っていたが、初代瑞山はすべて自分でやっていた。

「祖父の教えと言えば、土作りから成形、窯焼き、絵付けなど、仕事全部を自分ですること。掃除も含めてです。歳をとると土を練るのも大変ですが、今も全部やっています」

瑞山という名前を積み重ねていけば、萬古焼も伸びていくはず

桑名萬古の伝統技法と瑞山の名前を継承して

1984（昭和59）年、三代加賀瑞山を襲名する。初代が亡くなってから2年後のことだった。その2年は葛藤の時間だったと加賀さんは振り返る。

自分の名前でやるつもりだった加賀さんを襲名に傾かせたのは、「伝統」の持つ重みを感じたことも一因にあるようだ。日本橋三越本店での個展も、今年で8回を数える。しかし、いまだに来場者から「この抹茶茶碗、萬古焼ですか」と問われるという。

「六古窯に萬古焼は入っていない。伝統、歴史が浅い。人は何代も続くことを否定しながら、その根強い力に価値を見る。たとえば九谷とか、備前とか、信楽とか。積み重ねは大切やと思う。瑞山を継ぐこと、萬古を継ぐことは、それだけの重い荷を背負うことになる。自分の好きにはやれない。でも、瑞山という名前を積み重ねていけば、萬古焼も伸びていくはず。あまりに萬古焼は知られていない。萬古の価値観をあげたいねぇ」

最後に、穴窯を案内してもらった。上部には神棚が設えてあり、緑深い榊などが供えられている。作陶の技術を高く評価されている加賀さんも、窯の中の炎を操ることはできない。神さま次第だ。だからこその真剣勝負であり、面白さもあると話す。

個展は年1回と決めているそうで、次回は来年6月に松坂屋名古屋店で開く予定。すでにそのための作陶に取りかかっており、「もうちょっとやるわ」と今日も筆を手にする。

上）萬古焼の赤絵は、膠で溶いた濃い赤が特徴　中）仕事部屋の隣にある作品展示室　下）傾斜地を掘って、加賀さん自ら作ったという穴窯

青交趾釉若松彫平水指

萬古盛絵兜茶碗

萬古赤絵更紗紋茶碗

香炉

文／長屋整徳　写真／D-studio　デザイン／chica